

著：小林 啓

医療者のポスターデザイン
美しく伝え、心に響く学会ポスターの教科書

書評者：伊東 完 (筑波大学病院病院総合内科講師)

書籍の著者というものは、どこか完璧超人のように見られがちである。同一著者の書籍が複数ある場合は、それぞれが完成形で、明確なすみ分けがあるようにも思われる。しかし、実際はそこまで単純でもない。今、評者の手元に小林啓先生の『医療者のスライドデザイン』(2023年)と『医療者のポスターデザイン』(2026年)の2冊がある。ほぼ同じ装丁の、いわば青本と赤本だ(もっとも、並べてみると高さが微妙に違う)。これら2冊を前に、書店で「どちらを買うべきか」と悩んでいる人もいるに違いない。だが、結論は明快——迷わず両方買うべきだ。

著者自身が赤本の冒頭で認めているように、ポスターとスライドのデザインは大きく異なる。しかし、両者に重要な共通点があることを忘れてはいけない。それはストーリーの重要性であり、その前提として「何を伝えたいのか」を明確にする必要がある点である。青本がレイアウトのベストプラク

ティスを体系的に解説したいいわば「教本」であるとするれば、赤本はストーリーに応じてレイアウトを選び取るプロセスを示す「事例集」。したがって、ポスターを作る人が青本をすっ飛ばしてよい訳ではないし、スライド作成に赤本が不要ということもない。両著は相補的な関係なのである。

青本から赤本が刊行されるまでの3年の間に、評者は小林先生とデザインについて意見を交わしたことがあり、そのデザイン観の一端に触れていた。しかし完成した赤本を手にし、「著者がデザイナーとして研鑽を積む中で、さらに何か大きな化学反応が起こったのではないか」と直感した。

青本が主にデザインの What と How を扱っていたのに対し、赤本が深く掘り下げているのは Why である。つまり、赤本は、「デザインとは何か」という根源的な問いに対する著者なりの答えが豊富な事例を通して表現された一冊とも読めるのである。まさ

に、TED で一世を風靡したサイモン・シネックの登場を彷彿とさせる。この新境地は、青本にはみられない。

赤本が世に出るのは、ちょうどAIの時代である。多くの仕事がAIに代替されつつある現在、人間であることの価値があらためて問いかけている。そうした中で著者は、「私たちが人間であることに価値がある」と明言する。医療者としてのアイデンティティを形作る上で、デザインを学ぶ意義がこれまで以上に大きくなっていることを示しているのである。赤本は、そのことを静かに、しかし力強く示している。優れた作品を世に送り出してくれた著者と奥様に、深い敬意と感謝を表したい。

● B5・頁160 2026年3月
定価：3,740円
(本体3,400円+税10%)
[ISBN978-4-260-06284-8]
医学書院刊